

幼児教育センターだより

平成27年春号

大田区立幼児教育センター 幼児教育担当 (5744)1618



期待を膨らませて入園・進級した子ども達も少しずつ新しい生活に慣れてきた頃ではないでしょうか。友だちと一緒に遊びを楽しむ中、好きなものや自分の顔を描く等、表現遊びに取り組む機会も多いことでしょう。家庭でも表現する経験⇒‘アートの世界’を楽しめるとよいですね。そこで今号では、【表現することの大切さ】について考えてみました。

～子どもの絵に表れている形の意味～

私達大人は、子どもの描く絵について、見えた通りの形を描いて欲しい、色彩豊かに描いて欲しい、と願うあまりに、ついつい幼児の描く絵に大人の感覚を押しつけてしまうことがあります。

しかし、子どもが絵を描くことを嫌がってしまう場合の多くは、見えた通りに描くことを強要された経験が原因になっているようです。近代美術の巨匠といわれる『ミロ』や『クレー』は、形の原点を追求して、独特の『形』にたどりつきました。その『形』は、幼児の描く最初の『形』(象徴期に描かれる形)にそっくりです。子どもが描く『形』には、その子が表現したくなる必然性があり、子どもの絵はその子の「心の形」を表しています。だからこそ大人の価値観で評価をすると、子どもの心の発達に影響を及ぼす危険性がある、ということをお忘れずにいたいですね。

～絵に見る子どもの発達の道すじ～

子どもの絵は、人の心をひきつける魅力を持っています。つい微笑んでしまいたくなるような絵。躍動感ある生き生きとした絵。たくさんのメッセージが盛り込まれた絵。そんな子ども達の絵を年齢順に見ていくと、一人一人その子なりに発達の道すじをたどっています。しかも、この発達段階は心身の発達とも深いかわりがあるといえます。幼児の描く形は内発的なものであって、心の中にあふれるイメージが表出しているのです。

【なぐり描きの時期】 おおむね1歳半～おおむね2歳半



1～2歳児は、まず手にしたクレヨンを口にもっていったり、もてあそんだり、紙にこすりつけたり、といった行為から描くことへと移行していきます。この時期は、クレヨンを持って紙をたたくうちに点や短い線が描けている、といった段階です。手首だけでなく、ひじも使えるようになると、子どもの描く線は滑らかになります。らせん形や渦巻き形等の線を組み合わせると自由に線を描くようになります。

【象徴期】 おおむね2歳半～おおむね3歳児

この頃の子どもは‘ぐしゃぐしゃ描き’をしながらお話をするようになり、見たり聞いたりした経験や偶然に思い付いたことを三角や四角や円らしきもので記号のように象徴的に表します。線のかたまりや円形らしき物を指して『りんご』、『お母さん』等と言う姿は、最も自己中心的な時期の特徴であるといえるでしょう。この時期はとにかくたくさんなぐり描きをさせてあげたいものです。絵になる必要はなく、描くことを好きになることが大切なのです！2～3歳の子どもは、好きな色のクレヨン1色を使うことが多いので、他の色にも興味を持たせていけるとよいですね。



【カタログ期】 おおむね3歳～おおむね5歳児



☆左上は車、その下は赤ちゃん、右から父、自分、母。自分の描きたいことをカタログのようにバラバラに画面いっぱい描いています。

この時期は自分の知っている形がいろいろと描けるようになり、大人も描かれている物の形をすぐに理解することができます。この時期の絵の特徴は、描かれている物同士に関係性がなく、大小関係、因果関係、つりあいなどがとれていないところです。魚、木、太陽などが次々と並び、カタログのように描かれているので‘カタログ期’と呼ばれています。この時の子どもは、その物固有の色を使うのではなく、感情の色を用いて描いていますから、「色が間違っている」というような指摘をするのではなく、その色を選んだ子どもの気持ちやプロセス等を理解するように心がけたいですね。

【図式前期】 おおむね5歳～おおむね6歳児

子どもは知的な面、情緒的な面の成長とともに、自分を取り巻く周囲の関係や状況を理解するようになります。そして、人とはこんな物、家とはこんな物、自動車とはこんな物、というように一つ一つの事物について確かな認識をもち、それぞれの概念も形成されていきます。特徴的なのは、画面には上下左右ができ、大小のバランスや物と物との関係付けができてくるとともに、その物の固有色を使う傾向が出てくることです。また、空と地面との境界に一本の線を引き、家、木、花、人物、動物などを並べて描くこともあります。‘空間認識’が育まれている様子が伝わってきますね。



☆お父さんと自転車で散歩に行った様子が描かれています。

‘All About’ サイト情報>暮らし>心身の発達と深いかかわりをもつ子どもの絵の発達>より引用

【参考文献】「子どもの絵は何を語るか—発達科学の視点から」著) 東山 明 氏 神戸大学名誉教授 (美術教育)

～親子で‘アートの世界’を楽しみましょう～

これまで「絵に見る子どもの発達の道すじ」をご紹介してきましたように、表現遊びを通して、子どもは思い付いたことを自由に描くことを楽しむ中で、「知的好奇心」を高めたり、どの紙を選んで、何色を使って表現しようかな、といった「判断力」を養ったりしています。それと同時に自分の作品を「見て欲しい」、「認めてもらいたい」といった思いも強くなります。子どもが自分の作品について話し始めた時、私達大人はその話にしっかりと耳を傾け、「たくさん描いたね」「大きく描けたね」「この絵を見ていると元気な動物だってことが分かるよ」等と受け止めてあげましょう。こうした親子の会話を通して、子どもは自分の思いを表現する心地良さを体得し、コミュニケーション能力を高めていきます。さらには、表現したことが認められることによって、自信をもって行動する力も育まれていくでしょう。そして忘れてならないのは、表現遊びは、体を動かすことや心情、環境等と

密接に関連しているところです。子どもは全身や手先の機能を十分に使って遊ぶことにより、様々な事柄に意欲的に挑戦し、何回も粘り強く取り組もうとする力の基礎を培っていきます。日常生活の中で全身を使って遊ぶ、身近な素材を活用しながら‘アートの世界’を楽しむ等の親子の触れ合いを通して、子どもは夢中になって遊びます。この経験こそが子どもが自分の思いを様々な形で表現したり、意欲的に創造したりする力を育む基盤となるとともに、成長の道すじを豊かに彩っていくことでしょう。



幼児教育センター主催：家庭教育支援講座【キラキラ輝け、アートの世界！親子で楽しく表現遊び】
(日時)…平成27年8月6日(木曜日)10:00～11:30 (場所)…池上会館 集会室

☆様々な素材や絵具などを使って、4～5歳児のお子さん向けの‘アートの世界’を親子で体験したり、子どものイメージや創造力の大切さについて考えたりします。☆7月11日号の区報で参加募集をいたします。